

本日の学び テーマ：「山を下りる」テキスト：マルコ9章2節-13節

【理解の手がかりとして】

本日の箇所は「山上の変貌」と言われる有名な箇所。ここにはとても驚くべき出来事が記されている。まず前段の8節までの部分に目を留めよう。この部分の中心は7節のイエス様を「わたしの愛する子」と宣言する天の声にある。現象としてイエス様の姿の変容、真っ白な輝き、そして歴史の人モーセとエリヤの出現と言った点に注目しがちだが、しかしやはり中心は「わたしの愛する子」との声にあるだろう。その声は「雲の中から」した。雲は神様の臨在を意味するから、それは神の声であった。天の父が御子イエス様の権威をあらためて地上に表わされなされた、それがこの「わたしの愛する子」という宣言の意味である。

では、ここにどうしてモーセとエリヤが登場しているのか。モーセとエリヤは旧約聖書の代表である。モーセは律法の代表、エリヤは預言者の代表。よく旧約聖書を「律法と預言者」という表現をするが、ここでもそのような存在として登場しているのだろう。また、ユダヤの世界では、世の終わりにはモーセのような指導者が現れること、あるいは預言者エリヤが再来する、といった終末信仰があった。

面白いのは彼らがイエス様と「語り合っていた」(9:4)という点。何を語り合っていたのだろうか。ある解釈学者が、このところを指して「地平の融合」という言葉を使ったそう。それは、旧約聖書を通して新約聖書が分かり、また新約聖書によって旧約聖書を解く、といった意味だそう。その説明を受けて、あらためて7節の言葉を読むと、その強調点が分かる。「これは私の愛する子。これに聞け」(9:7)——「これに聞け」、すなわち「わたしの愛する子、このイエスに聞きなさい」ということであり、「このイエスの言葉に、わたしの御心はある」ということなのだろう。そしてその言葉の後には、もはやモーセとエリヤは見えなくなった。「ただイエスだけが」(9:8)そこに残っておられた。「ただ、イエスだけが」・・・とても印象的な言葉。そして「イエス様が共にいてくださる、このことで十分！このお方に神のみ心の成就是ある！」という意味だと理解する。

では次に後段9節以下の部分に目を留めよう。「一同が山を下りるとき、イエスは、『人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない』と弟子たちに命じられた。彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った」(9:9-10)。イエス様はこの「山上の変貌」の出来事について、「復活するまでは話してはいけない」と口止めをなされた。つまり、その「復活」を見ずしてはその意味が理解出来ないからであり、またもっと言えば、この「山上の変貌」は、「キリストの復活」を予め表わした出来事であった、ということである。

イエス様はフィリポ・カイサリア地方で、ペトロの信仰告白を受けた。その告白は「あなたは、メシアです」(8:29)というものだった。しかしその時も「御自分のことをだれにも話さないように」(8:30)言われた。それに続く「受難予告」(8:31-)はこう。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者から排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている」(8:31)。——ここで、イエス様ははっきりとご自身の「復活」について語っておられるのだが、しかしペトロはその「復活」についての言葉が耳に入らないのか、その前段の「十字架」についてのみ心揺らされ、心配になる。彼はイエス様を「わきへお連れして、いさめ始め」(8:32)たのであった。

私たちもこのペトロのように、聞こえてくる情報の中で、とかく暗いマイナスの情報に心を捕らわれてしまう。ここでのペトロの態度は、そのような人間的な部分をととてもよく示している。彼はイエス様の語られた「苦しみ」について心を捕らわれ、その後の「解放」について心が向かな

い。イエス様は、ここで確かに「苦しみ」を語られたが、それに続く「解放」——すなわち「復活」についても明言されているのである。

さて、ここでペトロについて考えておこう。彼はいつも率先して行動を起こし、率先して発言する人であった。イエス様が「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」(8:29)と問うた時、一番先に答えたのはペトロでした。イエス様の受難予告を聞いた時、イエス様をいさめたのもペトロだった。しかしこの時のペトロは、自分のイメージでイエス様をとらえていた。「十字架にかかるメシアなんてとんでもない」と。ペトロは十字架抜きの輝かしいメシア(キリスト)に従っていたのである。

この「山上の変貌」の場面にて、ペトロはまたもや出しゃばって、「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです」(9:5)と言う。これは、目の前に見た輝かしいイエス様の姿をそのまま取っておきたいという思いから出た言葉であろう。しかしこの態度は、先程来言っている「十字架抜きのキリストを求める」態度と変わらない。そしてさらに十字架を前にして、ペトロが「その人を知らない」と3度否定した態度とも変わらない。ペトロの3度の否認、それは自らの保身のために「関わりない」と否定したともいえるが、その事と共に、彼はこう言ったのかも知れない。「わたしは十字架刑に向かうような主人は知りません」と。

私たちのキリストはどのようなイメージだろうか。十字架なきキリストか。痛みや苦しみを知らない、そして死を経験しないキリストか。——否、私たちが信じるキリストは、その痛み苦しみを通り死んで行かれたお方である。しかしその「十字架のキリスト」は、同時に「復活のキリスト」でもあられる。十字架は、必ず復活へと続く。復活なき十字架のキリストを私たちは信じ、宣教しているのではなく、十字架と復活のキリストを宣教しているのである。そしてその信仰は、十字架と復活のキリストへの信仰は、私たちに勇気を与える。イエス様はこう言われた。「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」(ヨハネ16:33)と。

最後に、蓮見和男氏の言葉を紹介する。「わたしたちはこの世の悩みを負って生きて行かねばなりません。・・・しかし、イエスはすでに勝利しています。つまり復活して生きておられるのです。今日の山上の御姿変わりも、その勝利の表現にほかなりません。・・・一つ一つ今、当面の戦いを戦っていかなくてはならないのです。それは勝利に通じますが、苦難なしに勝利するわけにはまいません。」——あらためて、イエス様の言葉に勇気を頂き、世の悩み・苦しみを通りながらも、必ずや勝利へと導かれるとの平安を覚えさせられる。

(聖書教育より) 「山上で示された輝かしい栄光は、この世の苦難からの逃避ではなく、むしろこれから待ち受ける最も暗い苦しみと死を乗り越えるための力と、その先にある復活の希望を指し示すものだったのです。」(聖書の学び～山を下りる)